

## 第 1 部

## 1. スール (南) Sur

作詞：オメーロ・マンシ Homero Manzi 作曲：アニーバル・トロイロ Anibal Troilo

1948年にできた曲ですが、時を経て、この曲がうたう郷愁の風景がさらに遠いものになっていくほど、広く人々の心をとらえ、タンゴのひとつのシンボルみたいになった曲です。詩人マンシが学生時代をすごしたブエノスアイレス南部の、町はずれの風景です。まず詩が書かれ、バンドネオン奏者・楽団リーダーのトロイロが作曲。「スール (南) ……」とはじまる第2テーマはトロイロがメロディを考え、それに合わせて作詞されました。

古いサンフワンとボエード通りの角、一面の空。ボンページャ地区——その向こうは洪水を起こす川。思い出のなかの、若い恋人のきみの長い髪。そしてきみの名前が「さようなら」の上に浮かんでいる。あの鍛冶屋のあった街角、泥と草原。きみの家、きみの歩道、そして掘割。そして雑草とアルファルファのまじった

香りが、ふたたび、わたしの心を満たす。

古いサンフワンとボエード通りの角、どこかへ消えてしまった空。ボンページャ地区——土手に着くと、そこでふるえていた、きみの20才、あのときわたしが盗んだキスの下で。——過ぎて行ってしまったことどものノスタルジー。人生がいっしょに持って行ってしまった砂。変わってしまった街たちの嘆き、そして死んだ夢ののがさ。

スール……土の塚、その後は……とある酒屋の明かりひとつ。もうきみは、むかしのように窓に寄りかかってきみを待っているわたしを見ることはないだろう。もうわたしは、静かに語り合うふたりの歩みを、星たちで照らすことはないだろう。場末の道たちと月たち、そしてわたしの愛ときみの窓。すべては死んでしまった、もうわたしにはわかっている……。

## 2. ムニェーカ・ブラーバ Muñeca Brava

作詞：エンリーケ・カディーカモ Enrique Cadícamo 作曲：ルイス・ビスカ Luis Visca

1928年のタンゴ・コンクール「音楽」部門で6位。後に歌詞が付いて、カルロス・ガルデルが見事にうたい、29年にヒットしました。

作曲者はピアニストで、後年はラジオのソロ演奏で人気があったようです。作詞者は一生遊んですごした(ように見える)詩人で、タンゴの歌詞を書きまくりました。この曲は、ルンファルド(ブエノスアイレスのスラング)を多くまじえた、軽妙なひびきの歌詞です。タイトル(日本語の「すご腕」にあたる)は、ふつう競馬の騎手に使うことばです。

ねえマダム、あんたはフランス語をしゃべり、お金を両手でばらまく。よく冷やした酒をガブ飲みし、金持ちのジゴロを持っている。まつ毛の反り返った、いい女。ランキングの高いムニェーカ・ブラーバ。名前

は立派だけれど場末のキャバレー《トリアノン》の女、中古品のおもちゃ。

見張っていないと人生は行ってしまうよ。格調をなくした自分のシルエットをごらん。そしてもし涙があんたを探しに来たら、痛みはしぼり出してしまって笑いなさい。シャンパンをどンドン飲み、ムニェーカ・ブラーバ、罪の花。あんたのレースが終わるとき、あんたは若さが消えてゆくのを見るだろう。

あんたには、好きなようにさせてくれる金持ち男がいる。そして20の春がある、サバを読んでいるんだけど。お財布はいっぱいにくらんで、街の北から南へスケートさせていけるほど。みんながあんたを「すご腕」と呼ぶ。バカ男たちをほんとにフラフラにさせてしまうから。でもわたしにとっては、あんたは、愛と若さを、かけらも取っておくことを知らなかった女。

## 3. ガウチヨの嘆き Sentimiento gaucho

作詞：フワン・A・カルーソ Juan Andrés Caruso 作曲：ラファエール・カナーロ Rafael Canaro

1925年のタンゴ・コンクールの優勝曲。作曲者は、超大物の楽団指揮者フランシスコ・カナーロの弟で、兄の影武者のような活動をしていました。作詞者は、大衆演劇の台本や挿入曲の作詞などで、カナーロ兄弟

の良き協力者でした。

ここではフランシスコの愛人だったアダ・ファルコーンが、映画でうたった構成にしました。フィナーレにはヴァイオリンの副旋律のメロディをうたいます。

パセーオ・コローン大通りの古い酒屋、信じる心をなくした人たちが行くところ。そこで、とある午後わたしが出会った、ボロ服をまとった酔っぱらい、汚れた片隅に座っていた。彼の魂に秘められた痛みを察して、わたしは心を動かされた。そこで、そばにすわって、話しかけた。その男のいつわりのない告白——友よ、耳を傾けてお聞きなさい。

「わたしが心のすべてで愛していた女は、誘惑上手な男

について行ってしまった。わたしの喜びも彼女といっしょに行ってしまったけれど、もう二度と彼女に会いたくない。しあわせになったらいいさ、もうどうでもいい。わたしの感じていたあの愛のすべてを裏切りの刃が一撃で断ち切ってしまった」

心の痛みもまた、愛ゆえのものならば、なんと美しいものだろう！ 涙があふればあふれるほど、愛は大きくなる。愛の力の大きさよ！ 愛することの偉大さよ！

#### 4. 1900年のミロンガ *Milonga del 900 (milonga porteña)*

作詞：オメーロ・マンシ *Homero Manzi* 作曲：セバスティアーン・ピアーナ *Sebastián Piana*

ミロンガということばには、さまざまな意味・ニュアンスがありますが、ここではギターとの和音に乗せた語り物の歌のジャンル名です。大草原の伝統的なスタイルで、19世紀末のブエノスアイレスの街っ子がうたうというところが斬新で、1932年にヒット。作曲者はピアノ・音楽の教授でした。1940年代には『スール（南）』などで名声を上げる詩人マンシが、作詞家として認められた、最初期の曲です。

歌詞に出てくるレアンドロ・アレーンは、19世紀末の民衆擁護の政治家で、志やぶれ自殺しました。遺書のことは「自分をぶちこわせ！ でも自分を曲げるな！」——マンシは、この人が大好きでした。

ぼくは、きちんとしてないものが好き、歩道なんかは通らない。帽子は曲げてかぶり、ヒールの高いブーツを踏み鳴らして歩く。彼女を愛してしまったのは、

理由なんかなく、そうなったから。だからいつも悩んでる。彼女は、もういつだかわからない昔に、どこかへ行ってしまった。いつ帰ってくるかもわからない。

ぼくは恋愛は信用しない、ギャンブルは信用する。招かれたところにはずっといる。のけ者にされたところにも。ぼくはみんなの党の仲間、でも知っていてほしい。ぼくはレアンドロ・アレーンの党员だ。

ぼくは石畳がきらい、現代的なものも性に合わない。病気になったら休む、その後治っても休む。愛してしまっただけから愛した。だから彼女を許す。うらみや憎しみほど悪いものはない。苦い人生を送ることになる。

ぼくに彼女の名を告げるのは、うたって語るギターたち。そして街の小さな通りたちと、ぼくのナイフの刃。ぼくに彼女の名を告げるのは、星たちと場末の風。なぜぼくに名を告げるんだ？ そんなことしなくても、ぼくは忘れられずにいるのに。

#### 5. 下町のロマンス *Romance de barrio (vals criollo)*

作詞：オメーロ・マンシ *Homero Manzi* 作曲：アニーバル・トロイロ *Aníbal Troilo*

ヨーロッパに生まれたワルツは、19世紀からラテンアメリカでも深く広く愛され、各地に独自の風景・感情を反映したバルス・クリオージョ（南米生まれの土地っ子のワルツ）ができました。この曲は1947年に、『スール（南）』の作者コンビが発表しました。まず音楽、その後作詞されたらしく、なかなか歌にくい（語るのが難しい）歌詞です。それが青春らしさ？！

最初は、遠い4月（秋）のデート。あなたの暗いバルコニー、あなたの古い庭。その後は、熱にうかされた文字の手紙、「いいえ」と嘘をつき、「はい」と誓い……。下町のロマンス、最初は好きな気持ち、後に

は痛み。わたしたちふたりは犯さなかった、さまざまな罪が、わたしたちをくるしめた。

きょうあなたは、たぶんわたしを軽蔑しながら生きているだろう。忘れることができないという痛みに泣いているわたしから遠く。なるようになる運命だった。突然わたしたちは考えることができなくなった。すべてを拒んで発ってゆくことは、忘れることができず生きてゆくよりも、たやすい。

あなたの声とわたしの声は、打ち負かされて帰ってくる。その恐怖のトーンに、わたしたちが一度も犯さなかったさまざまな罪が乗っている。その罪の報いは、わたしたちふたりが支払わなければならなかった。

#### 6. ロス・マレアードス（酔いどれたち） *Los mareados*

作詞：エンリーケ・カディーカモ *Enrique Cadícamo* 作曲：フワン・C・コビアーン *Juan Carlos Cobián*

作曲者はピアニスト・楽団リーダーとしてタンゴ発展史の重要人物ですが、今日ではその足跡よりも、美しい和音とともに流れる珠玉のメロディの作曲家として、タンゴ・ロマン派（？）の最高峰と賛美されています。この曲は、1922年の、キャバレーを舞台に若

者たちの恋愛を描いた芝居『麻薬におぼれる人たち』の挿入歌でした。20年後に、アニーバル・トロイロが、この曲の素晴らしさを「発見」し、新しい歌詞で録音、有名になりました。カディーカモが、『ムニエカ・ブラバ』とはまったく異なるスタイルで作詞。

妖しく、まるで燃える炎のように、飲んでいるおまえを見つけた——人を死に誘う運命の美女。飲んでいて、そしてシャンパンの泡の閃光のなかで、狂おしく笑っていた、泣かないために。おまえに出会ってわたしは苦しくなった。わたしには見えたからだ、あれほど深く愛していたおまえの両目が、むかしのように電撃の光を放って輝くのが。

今夜、わたしの女友達よ、アルコールがわたしたちを酔わせた。人に笑われてもかまわない。マレアードス（目がまわっている人たち）と呼ばれても。だれに

も、それぞれの悩みがある。わたしたちにも、わたしたちの悩み。今夜は飲もう、なぜならもう、ふたりは会うことはないのだから。

きょうおまえは、わたしの過去に入ってゆく、わたしの人生の過去に。わたしの傷ついた魂には3つのものがある——愛と、悩みと、痛み。

きょうおまえは、わたしの過去に入ってゆく。わたしたちは新しい道を取ろう。なんと大きかったわたしたちの愛。ああ、それなのに、見てごらん、そこから残ったものを……！

## 第2部

### 1. マレーナ Malena

作詞：オメーロ・マンシ *Homero Manzi* 作曲：ルーシオ・デマーレ *Lucio Demare*

きょうは4曲めの詩人マンシの作品です。彼が著作権協会の仕事でラテンアメリカ各国に出張した帰りがけに、ブラジルのリオでナイトクラブに行き、偶然アルゼンチンの女性タンゴ歌手（ほとんど無名のアーティストです）マレーナ・トレードを聴きました。そこで一気にこの歌詞を書き上げましたが、そのときマンシは、愛人であるネリー・オマールの声を心に思い浮かべていたのだと、研究家たちは推察しています。わたしたちは、そんな芸能誌ネタにはわずらわされず、この曲の中だけに生きている、ほかのどこにもいないマレーナを思うべきでしょう。親友のピアニストが作曲し、1942年発表。

マレーナはタンゴをうたう、だれにもうたえないタンゴを、すべてのことばに心を込めて。マレーナはバンドネオンの悩みをもっている。たぶん、遠い子ども時代に、彼女のヒバリの声は、路地裏の暗いひびきを持ったのだろう。それとも、そのひびきは、彼女がア

ルコールで悲しくなったときだけ口にする、あのロマンスの名残りか……。マレーナは影の声でタンゴをうたう。

あなたの歌には、最後の出会いの冷たさがある。あなたの歌は、思い出の塩の中でいなくなる。わたしは知らない、あなたの声が悩みの花なのかどうか。ただ知っているのは、あなたのタンゴのつぶやきが聞こえると、あなたの大きな心を感じるということ、わたしよりもずっと大きな心……。

あなたの両目は忘却のように黒く、あなたの唇は固く結ばれた恨みそのもの。あなたの両手は寒がっている2羽の鳩。あなたの血管にはバンドネオンの血が流れている。あなたのタンゴは、路地のぬかるみを横切ってゆく、見捨てられた赤ん坊たち。すべての扉は閉ざされ、歌の亡霊たちが吠えている。マレーナは割れた声でタンゴをうたう。マレーナはバンドネオンの悩みをもっている。

### 2. アンダーテ（出て行って） *Andate*

作詞：ロベルト・フォンタイナ *Roberto Fontaina* 作曲：ロドルフォ・シアマレッタ *Rodolfo Sciammarella*

1933年、モンテビデオ（ウルグアイの首都）の劇場ショーで、女性歌手タニアが初演したようです。女性がうたうためのタンゴは少なかった時代ですから、すぐにブエノスアイレスでも、人気女性歌手たちがレパートリーにしました。作詞者は、ウルグアイ人で、歌とコメディをミックスした人気ショーの脚本・監督で活躍していました。作曲者は、大衆の心をとらえ、すぐに覚えられるメロディの天才といわれていました。後年、メキシコやスペインに長く住み、そこでもラジオやテレビのCM音楽、各種のリズムの歌謡曲を非常にたくさん作り、大ヒットも出しています。

どれほどの年月、わたしはくさりを引きずり、あきらめ切って、あなたにないがしろにされるのに耐えてきたことだろう。どれほど多くの夜、わたしは悩みに

閉じ込められ、あなたのひどい仕打ちから自由になりたいと望んでいたことだろう。わたしは心やさしい女、あなたはそれに値しない。わたしはあなたを求める、あなたはわたしを痛みで満たすのに。あなたがわたしに与えた苦しみを、あなたが知ったら、わたしの胸で、自分の愛のなさに泣くことだろう。

あなたに、過去に生きてもらいたい、あの深い愛情の時間を思い出して。あなたは一夜たりとも、キスと愛撫を忘れたことはなかった。そして突然あるとき、運命がわたしの女の夢を倒した。

出て行って！ わたしが苦しむだろうなんて思わないで。わたしの心は、最初の瞬間からこわれている。わたしは泣こうとも思わない。出て行って。そのほうがいい……ノー！ 行かないで、ここにいて！ わたしには、あなたの愛が必要。

### 3. いつの夜にか *Será una noche*

作詞：M・フェラダース・カンポス *Manuel Ferradás Campos* 作曲：ホセ・ティネツリ *José Tinelli*

1935年の曲。作曲者はピアニスト出身の楽団リーダー。『めぐり逢い *Por la vuelta*』など、洗練された和声感覚で愛される曲をつくりました。作詞者は、芸能・スポーツ担当の記者を経て、ふたつの人気芸能誌の編集長になった人です。

わたしは知っている、きっと、いつか幸せな夜がやってくるだろうと。それが、わたしの勝利の夜になるだろう、生きることの疲れが、あなたを帰ってこさせ

るとき。

だからわたしは待っている。だからわたしは夢見ている。わたしは知っている、遠くであなたが、わたしの思い出を祝福していることを。そしていつか、あなたは苦しみにも耐えられなくなる。ノスタルジーが、あなたをわたしのところへ帰ってこさせる。

あなたが戻ってくる夜、わたしの魂は星の光を身にまとうだろう。そしてわたしの心はひとつの花になるだろう、愛の夜露の下で。

### 4. アニョランサス (さまさまの追想) *Añoranzas (vals criollo)*

作詞作曲：ホセ・M・アギラール *José María Aguilar*

歌手カルロス・ガルデルのレパートリーの中では、もっとも知られていないほうでしょう。1930年ごろ短編映画（今日のビデオクリップのようなもの）でうたっていますが、レコードはどこにあるのか？ その後、うたった人もいないようです。作者は彼の第1ギタリストです。

凍った北風が、わたしのバラの茂みの花たちを殺した。わが青春時代から残ったものは、ひとりぼっちで見捨てられたバルコニーの手すり。中庭には昔と同じ泉、わたしのうたを聴くことができた泉。でもそのそ

ばで、痛ましい声で、冷酷な冬がうたいに来る。

白い雪が埋葬してゆく、すべての美しいものを、すべての愛を。ひとびとの魂の中でうたっているのは、悲しいミューズ、痛みミューズ。

きのう愛にあふれる巣を織り出したつばめたちは、相談しあってもう行ってしまった、もっと熱い、別の気候の土地に向かって。

でも冬は、その悲しみとともに、すぐに支配を終えるだろう。ふたたび、あの美しいものたちが帰ってくるだろう。そして全世界が、しあわせに笑うだろう。

### 5. 最後の酔い *La última curda*

作詞：カトゥロ・カスティージョ *Cátulo Castillo* 作曲：アニーバル・トロイロ *Aníbal Troilo*

トロイロのマンションで、彼と、作詞家、そして歌手エドムンド・リベーロが飲んでいるときに、ひと晩でできあがった曲です。前からトロイロの頭の中にあつた短いメロディを、発展させる形で、作曲と作詞が先になったり後になったりしながら進行していったらしいです。夜明けごろに完成し、窓を開けて、リベーロが下を通る通行人にうたったとか……1956年、場所はブエノスアイレスの中心街コリエンテス大通りでした。

まったく大衆の好みを無視したこの曲は「酔っぱらいが作った、わけのわからない変な曲」とだけ思われていました。でも1960年代の後半、リベーロとロベルト・ゴジェネーチェが、まるで押し売りするみたいに歌いつづけたことで、他の歌手たちも興味をひかれるようになりました。70年代からは、ゴジェネーチェの研究した語り方が、一般大衆にも感動を与え、現在は、この曲は広く「名曲」と認められています。

バンドネオン、おまえのしわがれ声の、やくざな呪いのことばが、わたしの心を痛めつける。ラム酒でできたおまえの涙は、泥が反乱を起こしている暗黒街までわたしを連れて行く。わかっている、もう言わない

で。おまえは正しい！人生はひとつの、ばかばかしい傷口。そしてすべては、あまりにもはかない。わたしの告白も、ただ一時の酔い。

おまえの、だらだらしたつぶやきは、ほんの少しの思い出と後悔をしたたらせている。おまえの酒は人の正体を失わせ、最後の酔いをぶちまけるとき、心臓の牛の群れを追ってゆく。大窓を閉めておくれ、太陽がゆっくりした螺旋（らせん）を燃やしている。おまえにはわからないのか？ わたしが忘れられた国から来たことが。そこはいつも灰色、アルコールの向こう側。

おまえの受けた罰のことを話しておくれ、おまえの失敗を語っておくれ。わたしを傷つけた悩みが、おまえには見えないのか？ あの愛のことを、ただそのまま話しておくれ。その愛は、忘却の裁ちくずの向こう側に行つて、ここにはいない。

わたしにはわかっている。こうやって泣きながら、ワインで語りつづけていることが、わたしをくるしめ、おまえを傷つけることを。でもそれは、バンドネオンよ、震えている古い愛なのだ。その古い愛は酔いつぶれさせてくれる酒を求めている。その酔いは最後には芝居を終わらせる、心に幕を閉めて。

## 6. ブエノスアイレスの歌 *La canción de Buenos Aires*

作詞：マヌエール・ロメロ Manuel Romero

作曲：アスセーナ・マイサーニ Azucena Maizani オレーステ・クーファロ Oreste Cúfaro

女性歌手マイサーニは、スペイン・ポルトガルのツアーから帰って、1932年に『ブエノスアイレス、わが愛する土地』という劇場公演をしました。そのときの新曲で、共作者のクーファロは外国ツアーにも同行していたピアニスト、ロメロはレビュー（後に映画も）の脚本・監督・作詞で大活躍していた人です。

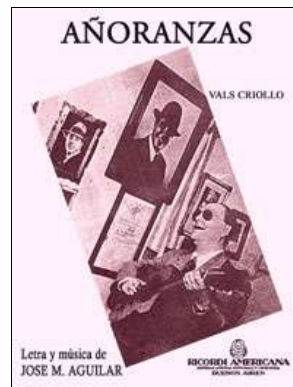
ブエノスアイレス、遠くにいたときわたしのなぐさめはただひとつ、バンドネオンの泣く甘いタンゴのメロディだった。ブエノスアイレス、よその空の下でおまえを思ってため息をつきながら、わたしの心はどれほど泣いたことか！ おまえのノスタルジックな歌を聴きながら。

ブエノスアイレス、タンゴの生まれたところ、わたしの愛する土地。わたしはおまえに捧げたい、歌に魂のすべてをこめて。そしてわたしの運命にお願いしよう。命の終わるときには、おまえのノスタルジックな歌を口ずさむバンドネオンの泣き声を聞いていたいと。

ブエノスアイレスの歌、おまえの奥底にはなにか、いつまでも生きつづけるものがある。ブエノスアイレスの歌、苦悩の哀歌、希望のほほえみ、情熱のすすり泣き。それがタンゴ、ブエノスアイレスの歌。場末の生まれ、いま世界に君臨する。それがタンゴ、土地っ子のわたしの心のいちばん深いところに突き刺さって、いつもわたしといっしょ。

タンゴの時間をごいっしょに過ごしていただき  
ありがとうございました。  
これからも、タンゴのさまざまな感情を  
うたっていきます。  
またお会いできるのを楽しみにしております。

選曲・構成：峰 万里恵  
プログラム作成：高場 将美



インターネットをお楽しみの方は  
どうぞホームページをごらんください。

☞ 峰 万里恵ホームページ  
<http://mariemine.web.fc2.com/>

📎 付録「うたをもっと感じるために」（高場 将美・筆）  
[http://mariemine.web.fc2.com/appendix\\_index.html](http://mariemine.web.fc2.com/appendix_index.html)

## 峰 万里恵 スケジュール

タンゴと、たとえばファドでは、ことばの発音は当然ですが、発声法からすでに違います。別のジャンルを研究すればするほど、それぞれの特徴・個性がはっきりわかってきます。いろいろ学んでゆくのはむずかしく、とても疲れるのですが、どのジャンルでも好きな曲だけをえらんで、うたいつづけていこうと思います。

9月5日(土) 19:00 開演

ファド・ライブ

Asa do Vento (風のつばさ)

ギター：高場 将美

高田馬場 《Olé》 03-3364-3466

チャージ：1500円

(ご飲食はお店の通常料金です)

9月19日(土) 20日(日) 21日(祝)

FIESTA MEXICANA 2009

フィエスタ・メヒカーナ in お台場 TOKYO

お台場 ウェストプラザ(ゆりかもめ「お台場」駅南口特設会場)

\*入場無料。今年で第

10回をむかえる健康食品などのテントが  
タコスなどのメキシコ料理と10店並びます。野外ステージ「太陽広場」ほかでさまざまなイベントがあり、  
わたしもメキシコの歌をうたいますが、日時は直前にならないとわかりません。

<http://www.fiestamexicana-tokyo.com/>

9月27日(土) 13:30 ~ 15:00 (予定)

バラのまち中央区アート・フェスタ 蔵のまちコンサート

ギター：飯泉 昌宏

与野本町(さいたま市)「蔵づくしの家」馬頭琴ほか、第2部「アルゼンチン・タンゴ」を、飯泉さんのギター・ソロと、わたしの歌でおとどけます。

\*入場無料(蔵の前の野外ステージ「蔵づくしの家」(埼京線「与野本町」駅下車))

<http://www.geocities.jp/artfesta2007/index.htm>

10月7日(日) 19:30 開演

ギター：三村 秀次郎/高場 将美

六本木 《ノチエーロ》 03-3401-6801

ノチエーロ・セット：2600円(おつまみ1品、チャージ込み)

+のみもの(ワイン700円ほか)+サービス料10%

\*メキシコのランチェーラやボレーロ、ペルーのワルツ、  
ファドなどのジャンルを予定しています。

➡ ご予約はお店に直接、または峰 万里恵まで—— tel: 03-3479-2420 fax: 03-3235-0470  
E-mail: marie-mine@hotmail.co.jp